と言えば、二人の婆さん共、
「そうだ〈〈。」
と簡単に笑って賛成してくれた。
私が最も痛快に思うのは、その当時不平不満も言わず
に肥桶をかついでいた生徒が、美しく眩しいような主婦
となり、見事な野菜を、
「先生、これは私が肥をかけて育てあげたものです。」
と、誇らしげに言う姿に接したときです。
（住所 — 佐伯市城南区）

旅行記

# 天草、島原、そして長崎へ

—キリシタン遺跡探訪の旅に加わり…—

文　高木嘉吉
俳句・烏人　末光拳
（大分市坂ノ市町）

大分県地方史研究会と、大分探勝アルコウ会共催の標記の旅に参加した。九月二十四日から二十六日まで二泊三日の旅で、日程コースは左記の通りであった。

二十四日　大分　竹田　七ツ森古墳　大津街道　宮本武蔵塚　熊本市竜田山自然公園　細川ガラシヤ夫人墓　天草五橋　本渡市殉教公園　本渡市梅林ホテル泊

二十五日　苓北町富岡城跡　首塚　鬼池　ロノ津　原城跡　島原城　雲仙　本多ホテルで昼食　地獄めぐり　千々石松橋神社　少年ローマ使節千々石清左衛碑　長崎市二十六聖人記念館　平和公園　魚ノ町とらやホテル泊

二十六日　興福寺　崇福寺　異人館　グラバー邸　昼食　国見町（島原）　長州町（熊本）　熊本　竹田　大分

一行は貸切大型バス一台の五十余名であったが、本年の五月十八日に堅田合戦の跡を探訪した際、立川先生と共に大分から来佐参加された坂ノ市の末光拳氏夫妻が居られ、再会き共び合って行を共にした。末光氏は烏人と号して俳句を作られることは、前号市野瀬会員の富士登山記にも掲載されて、皆さんに親しまれているが、今回も各所の印象を十七字にまとめて送って下さったので、同氏の諒承を得て適宜に掲載することにした。

## 七ツ森古墳

竹田市の郊外、旧菅尾村にある。街道からちょっと入った所である。こじんまりした前方後円墳と円墳（前方部が欠損したものかも知れない）数個がある。古墳時代に此の地方に居た豪族の墳墓であろうが、誰のものか定かでない。

露草の瑠璃を薄に古墳群　烏人

## 武蔵塚

大津街道沿いのこんもりした森の中に加藤清正を祀る小社があり、その境内に武蔵塚がある。碑前にぬかづいて剣聖の面影を偲ぶ。

剣と画の精魂ここに竹の春　烏人

## 細川ガラシヤ夫人の墓

熊本市竜田山自然公園の中に、細川家の廟所があり、その一角にガラシヤ夫人の墓がある。細川家の他の墓と同様、五輪作りの堂々たるものである。秀林院殿華屋宗玉大姉叔霊と記されている。容姿端麗、敏和聡明の誉れが高かった夫人の、苦難の生涯を想って感無量。

殉節の廟のしじまや法師蟬　　烏　人

## 天草五橋

三角から大矢野島、上島を結ぶ天草五橋は、四周の山海と橋の姿がよくマッチして、あかぬ眺めである。松島橋（五号橋）を渡った松島町の展望所で、渡って来た五橋を振り返って見ながら展望を楽しむ。天草松島とパールラインは、キリシタン殉教の哀史に彩られた天草の門戸として、年々数百万の観光客を迎送すると共に、天草の開発にも重要な役割を果している。

## 殉教公園

夢と詩の天草の景観を楽しんでいる中に、車は本渡市に入って殉教公園に到着する。

ここは市街西部の本戸城跡を公園としたもので、天草切支丹館には天草全島から集めた南蛮文化、天草の乱、代官行政、かくれキリシタンなどの天草切支丹遺物の他、天草考古歴史資料や古陶磁器、民芸品等が展示されている。又殉教戦千人塚、キリスト平和像、天草学林の跡等も公園内にあって、訪れる人の足を止めさせている。

赤のままキリシタン墓庭に咲く　　烏　人

秋日落つ千人塚に祈るとき

秋陽西に落ちて薄暮せまる頃、本日の宿舎梅林ホテルに着く。ここは本渡市の東北部の丘の陵上にあって、窓から本渡市が一望されることは幸であった。

## 富岡城跡

二十五日、車は本渡から富岡へ向こう。城跡の丘陵はもとは島であったが、砂洲が本土と島を結び、そこに富岡町が発達した。

慶長五年唐津城主寺沢広高は軍功により天草二島を加封され、同九年富岡城を築いて城代を置き、天草を統治させた。寛永十四年、一万二千の一揆軍は十字架の旗をたてて之を攻撃したが、攻め落すことが出来ず、島原の原城に向ったのである。

城跡に立って寛永の昔を偲べば、松籟にまじってキリシタンの雄叫びを聞く感があった。

萎れ咲く籠舌蘭や崖崩れ　　烏　人

## 頼山陽の詩碑と切支丹供養碑

二つとも富岡の海に面した砂丘の上にある。前者には文政元年山陽が西遊の途中に詠じた「雲耶山耶呉耶越」に始まる泊天草洋の詩が刻まれている。後者は千人塚または首塚とよばれ、島原の乱後の寛永十五年キリシタン宗徒三千の首を、有馬、浦上、富岡の三か所に埋納した。その一つである。碑の頭部に大書された　鴨の異字はウハキュウと読み、伝法の功徳を此の一字にこめたものであるという。

山陽の天草灘や秋晴るる　　烏　人

首塚や浜木綿乱れ香華濡れ

## 原城跡

天草鬼池からフェリーで対岸島原半島の口の津に上陸、海岸を東北行すること少時で原城跡に達する。今回の探訪中最も深い印象を残した所である。

城跡は島原湾に臨んだ丘陵で（標高三十米）、丘陵と本土との間は寛永時代は湿田であったが、今は砂が堆積して畑地となっている。海に面する所は断崖絶壁で、難攻の

要害の地である。

明応五年有馬氏によつて築城されたが、元和二年松倉氏が大和から入部して島原に森丘城を築いた際、城壁の石材を持ち去つて廃城となつた。松倉氏のキリスト教徒の弾圧と、築城其の他のための重税とが、島原の乱の主因である。

三の丸から二の丸に至る間に大きな空堀の跡があるが、籠城食糧の欠乏にともない、戦闘力のない老幼婦女のキリシタンは、ここに坐して皆餓死したと伝えられ、今は畑地となつているが、深く耕せば骨片が累々と出るとのことである。バスのガイドが歌う天草四郎美少年の歌もここで聞けば哀調切々、寛永の昔三万七千余のキリシタンの死闘を偲んで、去り難いものがあつた。

カン十郎や純血ここに埋もりて　烏　人
三の丸抵れば屍　蜜柑熟る

## 島原城

島原城は復元されて、眉山を背に秋空に美しく聳えて立つている。石垣は原城と関連して眺めれば又旅の感傷をそそる。

天守閣内にキリシタン史料博物館がある。なお一階に大友義統の書状が陳列されている。渡辺先生の説明で眼をとめたが貴重な史料である。

天高し眉山を楯に天守閣　烏　人
九十九島抱き秋めく城下町

## 雲仙

島原から雲仙へ、道が上るにつれ、左手に展開する島原湾や対岸宇戸半島、天草諸島の風光は、旅の疲れを忘れさせる。雲仙で地獄めぐりを楽しんだが、別府の地獄とはまたちがつた趣がありて面白い。

秋暑し毒帯お糸の噴く地獄　烏　人
修羅の名の地獄裏き岩が炒け

## 橘神社と千々石清左衛門

雲仙から小浜町に出て橘湾沿いに北行すると、千々石町に達する。

橘神社は軍神橘中佐を祀つたものであるが、広瀬神社と較べて規模がかなり大である。境内に天正の遣欧使節千々石清左衛門の碑がある。清左衛門は天正十年の出発当時十三才で、四人の使節中最も愛想よく、且つやさしかつたと伝えられている。

## 長崎平和祈念像

千々石町から諫早市を経て長崎へ、そして平和公園に着いたのは夕方であつた。早速平和祈念像の前に佇かづく。

上を指す右手は厚爆の威力を、水平に伸ばした左手は平和を意味し、偉大な肢体は絶対者の神威を、柔和な顔は神の愛、仏の愛を、軽く閉じた眼は戦争犠牲者の冥福を祈つている姿である、という。

黄に咲いてここは長崎彼岸花　烏　人
曼珠沙華供華とす丘の被爆の碑

かくて魚の所のとらやホテルにおちつく。疲れて夜景見物に出かける元気もない。

## 興福寺と崇福寺

二十六日の第一歩は標記二寺の見学からはじまつた。二寺ともに所謂唐寺である。

興福寺は天和九年、崇福寺は寛永六年、何れも長崎在

住の唐人によつて創始された寺である。当時のキリスト教の弾圧に対して、キリスト教徒でないことのあかしとして、又望郷の念切なる唐人が、故郷を偲ぶ心のよりどころとして建立したものである。

赤い柱に白い壁、極度に反り返つた軒先など、悉く中国風かものである。大雄宝殿の本尊も、中国の聖人であるのも興味深いものであるし、山門が鐘楼と鼓楼と禅堂を兼ねて、鐘鼓楼と呼ばれているのも面白い。媽祖堂、美しい姿の魚板等見るべき物が多い。

原色の鼓楽音なき秋しぐれ　　烏　人

二十六聖人記念館

慶長二年二月五日、スペイン宣教師ペトロ・バプチスタ等六人の外国人と、パウロ・三木ら二十人の日本人は、この西坂の丘で十字架にかかり殉教した。その殉教をたたえて世界各地から、二億数千万円を集め、昭和三十七年、大記念碑、キリシタン資料館、記念聖堂が建設された。大記念碑の二十六聖人の等身大のブロンズ像は、殉教のきびしさ崇高さを表現し、碑の背面の石組みは、二十六聖人の苦難の道行きを示している。

殉教碑そびえ夏竹桃紅し　　烏　人

聖人碑秋雨に濡れ吾も濡る

グラバー邸、異人館、大浦天主堂

三者とも近い所にあつて見学に便利であつた。それぞれ北豊富女歴史と伝承をもつ所で、私の浅学をもつてしても、記せば原稿紙何枚かをうめることになるが、稿が長くなつたので省略する。

海紅豆(かいこうず)くれないに炎えうら悲し　　烏　人

異国めく丘に残暑の海紅豆

帰途

異人館で昼食の際、長崎名物の竜踊りを見せてもらつたのは、思い出を一つ加えるものであつた。かくて、

銅羅の音に帰り踊る残暑の竜　　烏　人

秋旅に見る思案橋あつけなや

の感慨を残して長崎を辞したのは正午すぎであつた。

帰途は坦々たるバスの旅であつたが、諫早市から雲仙丘を右手に見つつ島原半島北岸の国見町に至り、フェリーで対岸熊本県長洲町に渡つて、熊本―竹田―大分と進んだが、私は犬飼で一行に別れ、軽い疲れと充分満ち足りた心を抱いて一人佐伯に帰つた。

今回の旅行には、大分大学の渡辺先生と兼子先生が終始同行して、種々解説して下さつたことは旅の収穫を更に大きくした。両先生並に俳句を寄せられた烏人未光等氏に謝意を表しペンを擱く。（住所　佐伯市慕原五）

---

鏡峠を歩いて　　羽柴　弘

去る十月廿四日、私は床木の毎かる鏡峠に登つた。秋晴のよい天気であつた。

茶屋場から登りにかかり、山腹を羊腸とつづく昔ながらの小径をかなり登り、一旦宇戸渓谷を眼下に見下す絶壁の上に出る。更に少し登つて展根に出る。それから長々とつづく峠道、右側は一面の松林、左手は眼の届く限りの造林成林地、はるかに津久見側から登る尺間峠山道までつづいている。展望は実によい。

道巾は一米半ほど、坦々と僅かな登りでつづく。且つ佐伯から大分方面をつないでいた公道であつた。所々で曲りくねりつゝ軽四でも通れる程の平坦な道が二粁ほどつづき、絶頂に近いところは切通しになり、右すれば竹越峠から高岳方にと行けば一の鳥居から野津大分へ出ずる。　芝落葉踏む鏡峠の古道に